

12月1日、今年話題になった言葉を選ぶ「新語・流行語大賞」が発表され、年間大賞には「3密」が選ばれました。トップテンには新型コロナウイルスに関連する言葉が大半を占めており、国難とも言われる感染拡大の重大性を象徴しているように思います。この事態にあって、医療従事者など、私たちの命、生活を守るお務めをされている方々への敬意と感謝を語らずにはいられません。

何をするにしても、コロナの影響を考えざるを得ない状況が見られ、仕事、余暇、食事、学校生活、冠婚葬祭等々と至るところで「新しい生活様式」が見られ、数多くの行事、催し物なども相次いで中止となりました。やむを得ないことと理解しながらも、人が語らうこと、集うことを、これほどまで自粛・制限せざるを得ない事態はとても残念に思います。人と直接対面して、安心して自由に交流できることのありがたさをつくづく感じた一年でした。

さて、そうした令和2年ではありますが、12月6日、「はやぶさ2」の地球帰還という明るいニュースが届きました。「はやぶさ2」は2014年12月3日に種子島宇宙センターから打ち上げられ、6年間、総飛行距離52億キロメートルにも及ぶ長旅をしてきました。この間、2019年2月と7月、小惑星「リュウグウ」への2度の着陸に成功し、表面の石や砂などの採取にも成功したとみられています。JAXAのプロジェクトマネージャーの方が「今回のような帰還は人類史上そうそうないことだ。」と語るほどの偉業です。

「リュウグウ」に到達するだけでも3年半を要するものですし、地球から3億キロメートルも離れた、直径900メートルほどの小惑星に正確に到達するだけでも非常に難しいことだそうです。更には、「リュウグウ」の表面を掘り起こして、内部の石や砂などを採取するにも高度な技術が求められます。しかも、地球から遥かに離れた「はやぶさ2」を遠隔操作している訳です。こうした高性能の「はやぶさ2」の製造や計画を生み出した技術力、遂行能力など、このプロジェクトをやり遂げた人類の英知に感銘を覚えます。

無事に回収された「玉手箱」とも言えるカプセルの中は、どのようなお宝なのでしょう。採取したものから、地球の生命誕生の起源、太陽系の成り立ちなどの探究につながるそうですから、今後の研究成果が楽しみです。

「はやぶさ2」は燃料がおよそ半分程度残っており、カプセル切り離し後は軌道を変えて、新たに11年、およそ100億キロメートルの旅へと向かいました。「お疲れさま」と労うとともに「これからも無事に旅を続けてほしい」と祈りたい、そんな気持ちになりました。

明けても暮れてコロナ関連の出来事ばかりが目立った今年ですが、ワクチン開発が進み、海外では接種が始まるとの報道に接すると、少し明るい兆しがあることを嬉しく思います。今後、人類の英知により、通常のインフルエンザのように特效薬やワクチンが開発され、効果的に使われるようになれば、今よりは安心して「with コロナ」になるのかと、一日も早いその時が待たれます。

読者の皆様には、お元気でよい新年をお迎えになりますよう、お祈りいたします。(N.W)